

# 歯科医療の

# 守備範囲を広げる

# ニユースキャンの活用



歯科医師／トータルヘルス  
アドバイザーズ代表

荒井 正明

1959年埼玉県生まれ。歯科医師／口腔生体医学研究所 代表／トータルヘルスアドバイザーズ株式会社 代表取締役／(医)社団博明会 理事長／日本口腔生体医学研究会／日本顎咬合学会 認定医／全身咬合学会／日本臨床インプラント協会 認証医／著書に『口から脳を活かすトータルヘルス』、『口腔プロバイオティクス&アンチバイオティクスー検査から始まる細菌の新しいコントロール法』(共著)。

「呼吸と咀嚼が正しくおこなわれるなら、百歳まで生きられる」

これは、紀元前200年頃の中国最古の医学書、『黄帝内経』という東洋医学の最古の古典に出てくる言葉です。

東洋医学では、はるか昔から、私たちが日常何気なくおこなっている「咀嚼」という行為を、「呼吸」と同等にとらえていたのです。これは、「咀嚼」が単なる消化を助ける行為だけにとどまらず、脳内の血液循環にも大きな役割を果たしていることを示しているのではないのでしょうか。

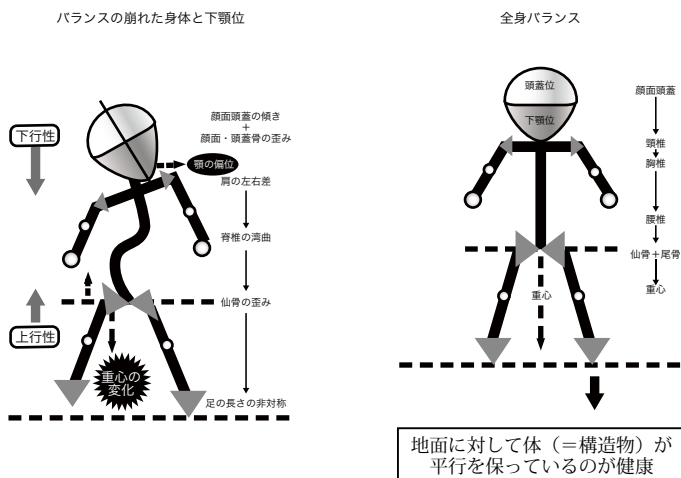
昔は歯が悪くなると、近くのかかりつけの歯医者さんに診てもらい、痛みがなくなるように最善の処置をしてもらう。それで事足りていました。しかし、今は違います。歯（口腔）は、単なる食事を取るための入り口であるだけでなく、今や心臓病や糖尿病などの疾患にも大きな影響を与え、全身の健康を左右する重要器官としてとらえられています。そして、痛みの局所の治療だけにとらわれるのではなく、噛み合わせなどを考慮した予防医学的な歯科治療を進めていくと、肩こりや頭痛、不眠などの全身症状の改善が見られることにも注目が集まってきました。いわゆる統合歯科医療の考え方、QOL（Quality of Life / 生活の質）の向上です。

## ●体のバランスのカギを握る下顎の動き

2008年までの約20年間、私は歯科医師として、虫歯や歯周病治療をおこなっておりましたが、さまざまな自問自答をしていた日々でした。同じ痛みや症状でも、原因は人それぞれ違うこと。ただ単に医療行為をするだけではなく、患者さんが自分では気づかずにはいた日常生活内での発病の原因を見つけ出し、改善・除去し、再発しないように導くことの大切さ。教えるのではなくご自分で気づいていただくことが重要だと感じたのです。

患者さんの歯の磨き方や咀嚼の癖、食事をはじめとする生活習慣も重要なことですが、私が注目したのは、患者さんの「体のバランス」でした。そのカギを握っているのが、「下顎」の状態です。

下顎の働きというのは、上顎に対して上下したり、水平に移動したりすることにより、歯が食べ物を噛み切ったり、すり潰したりすることです。この下顎の運動は、「咀嚼筋」という手足にある筋と同じ骨格筋が主に働いています。



そして、この下顎は、体に対して振り子の  
 ような役割を果たしているため、体のバラ  
 ンスがくずれてしまうと、その影響を受  
 け、これを補正するように働くのです。そ  
 の結果、下顎周囲の筋肉や顎関節、口や歯  
 などにも悪影響が及んでしまうのです。歯  
 痛の症状も実は、その根底に体のバランス  
 の乱れや下顎のゆがみが原因であるケース  
 が出てくるわけです。逆に、くずれた体の  
 バランスを調えることで、体や下顎、歯に、  
 さまざまな良い影響を及ぼすこともでき  
 ます。

2009年より歯科の介入が脳に及ぼす  
 影響や、噛み合わせが全身の健康や病氣と  
 関わっているのではないかと考え、研究を

続けてまいりました。現在は、トータルヘルスアドバイザーズ（株）・口腔生体医学研究所の代表として、「咬合と全身の関係」をテーマに、口腔と脳の関係性や新たな歯科医療のあり方を多くの方々にお伝えするため、セミナーをはじめとした活動を続けております。

### ●咬合と全身のバランスを調えるニュースキャンの調律力

現在は、ニュースキャンを歯科治療に応用しています。歯の噛み合わせの調整において、私が十数年かけて学んできた「身体の手技的バランス調整法」に加え、ニュースキャンの「五臓六腑のセラピー」が、身体のバランス調整にとっても有効なことを実感しています。身体の軸が短時間で調っていくのです。

咬合の良し悪しは形態と機能の側面からは評価できませんが、咬合調整による姿勢の改善など、全身との関わりはなかなか評価できないのが現状です。例えば、噛み合わせのバランスがくずれてゆがんでいたら、そのゆがんだ情報が脳に伝達されると考えられます。ネズミの歯を削ると、学習能力が下がるという

実験がありました。が、実際に脳を見て診断できるようになったら、正しい咬合状態で噛むことのメリットが証明されるわけです。

ニューロキャンは、脳の中（大脳基底核、視床下部、脳幹、小脳、脊髄など）や脳内分泌物質などの調律が可能ですので、咬合と全身との関係だけでなく、8020達成者（『8020運動』とは、1989年、当時の厚生省と日本歯科医師会が推進した「80歳になっても20本以上の自分の歯を保とう」という運動）と認知症との関係など、社会に必要とされている歯科医療のニーズがどんどん掘り起こせるのではないかと考えています。

ニューロキャンを歯科的な見地から用いることができれば、今までの手法ではできなかった脳と歯（噛み合わせ）の調律が可能になり、口腔から脳を含めた全身にアプローチできる歯科神経医（Neuro Dentist / ニューロ・デンティスト）に必要なアイテムになると考えられます。現在、私にとってニューロキャンは優秀な片腕的存在です。